

## 宮沢賢治における健康と病氣

### 『イーハトーボ農学校の春』と『雨ニモマケズ』

黒澤勉  
(岩手医科大学教養部 文学)

#### 一、健康と病氣

健康も病氣もいのちの現れである。いのちの営みの中に、健康があり、病氣があり、誕生があり、成熟があり、老化があり、死がある。

いのちはそれぞれの個の営みであり、身体と心、それを取り巻く自然的、社会的環境の中で影響を受け、また環境に影響を与えつつ、様々な形で表現されるものである。いのちは表現活動だということも出来る。

特に人間の場合、言葉による表現によって、自己のいのちが他者のいのちとつながる。健康とは何かを考える時、単に身体だけの問題でなく、精神的、社会的な問題もふくめて考察しなくてはならないと言われるが、言葉は一人一人の心と身体を反映している。内なる言葉は外に表出される―話される、書かれることによって、他の人々に影響を与えることもある。

宮沢賢治の言葉を通して、健康と病氣という問題を探ってみたい。言葉として表現された健康と病氣を探ってみたい。それは私たちにとって、健康を生きる、病氣を生きる、つまりは「いのちを生きる」豊かなヒントを提供してくれると思うからである。

#### 二、賢治の健康、その喜び

短命で（満三十七歳の短い生涯であった）あり、かつまた病床に臥す日の多かった（三十二歳以降は結核との闘いであった）賢治にも健康な時代があった。それは農学校の教師として勤めた四年四ヶ月である。一九二一（大正十）年の十二月三日から一九二六（大正十五）年三月三十一日迄、年齢でいえば二十五歳から三十歳迄、輝くように生き生きとした青年教師賢治の姿が豊かなエピソードを通して語られている。

「人は健康を失って初めてその大切さに気づき生活を改めようとする」とよく言われるが、賢治の場合もそうであった。「私も農学校の四年間が一番やりがいのある時でした」その頃はなほ私には生活の頂点でもあった」などと農学校の教え子の沢里武治宛書簡（一九三〇、昭和五年四月一日付）に記しているように、元氣あふれる、明るい教師生活を賢治は過ごした。しかし、その充実した生活を捨てて、農村に飛び込み、自ら鎌を握りつつ農民の指導者となる。教え子たちに「百姓になれ」と説く自分自身がサラリーマンとして、安定した生活を保障されていることに矛盾を感じたからだ、と言われているが、貧困に苦しむ農民の姿を目の当たりに見て、救いの手を差し伸べずにはおられなかったであろう。

賢治の農民運動は、稲作を中心とする農業指導ばかりでなく、青年たち

を集めて楽団を作るなど農民芸術を説き、自ら生活即芸術の生活を実践するなど、多岐に渡っていた。

それは、宮沢家の別宅での独居自炊の、しかも極端に質素な生活であり、たちまちにして宿痾である結核を悪化させ、わずか二年四ヶ月程で挫折してしまう。二十二歳の時、岩手病院で肋膜炎だと診断され、妹のトシを二十六歳の時に結核で失っている賢治は、妹と（そして母も）同じ結核であり、無理をしてはならない体であった。しかし賢治は「死につながる病気だから体を大切にしよう」と考えるのでなく、「どうせ短い命だからやりたいことをやろう」という焦りにも似た思いがあったようである。生き急ぎのようにも思えるその人生は（啄木もそうであったが）短命の自覚ゆえの焦りともみえる。自分の体、健康などということより、情熱が勝っていた、ともいえよう。肋膜炎を宣告された時、賢治は、「おれの命もあと十五年か」と友人の河本義行に語っているのである。不思議なこととその通りとなった。農民運動の過労と栄養失調のため病床に臥した賢治は苦い思いで自らを振り返っている。曰く「わずかばかりの自分の才能に慢じて実に虚傲な態度になってしまった」私のかふいふ惨めな失敗は今日の時代一般の大きな病「慢」といふものの一支流に過って身を加えたことに原因します」と。それは教師時代、万能感に支配され、農民の救済を夢見た「慢」の結果、病に臥す身になったという反省であろう。病気になったのは、農民運動の無理の結果だが、そのような無理を考えたのは、農学校教師時代の万能感、驕りであり、その驕りが農村社会への参加につながった。自らの青春の「慢」を振り返り、それこそが病気の原因であったと考えるのである。病気は時として、私達にこうした深い内省をもたらす。

それにしても、健康で元氣あふれる教師時代、賢治はその健康感覚を見事に表現している。『イーハトーボ農学校の春』という作品である。これは賢治の勤務した稗貫農学校での農業実習の体験を素材としたもので、生徒たちと共に、肥やしを汲んで麦畑に運ぶ作業が歓喜溢れる、躍

るような詩的な文体で書かれている。健康とは何よりも喜びである。明るさである。この頃、賢治と親しい交わりを結んだ花巻女学校の音楽教師、藤原嘉藤治は「賢治は大変面白い人だった。モナリザの微笑とも何ともいえない微笑だった」と書いているが、農学校教師時代においては、特に明るい人であったと想像される。この作品を読めばそのことが実感できるのである。その喜びはどこから産まれたものであろうか。

第一に、太陽である。賢治はこの作品で太陽を「光炎菩薩太陽マジック」と呼んで、その太陽の「歌をお聞きなさい」と書き、驚くべきことにその太陽光線の奏でる歌の楽譜まで、この作品の中に挿入している。その楽譜は賢治が歌ったものを藤原嘉藤治が記したのではないかと推定されている。（生原稿を見ると、歌詞の上に楽譜が貼られている。）

北国の人間にとって春の訪れは誰にとっても心の大きな喜びである。凍てつく寒さもゆるみ、日が長く、日差しも一日と明るくなる。それに影響されて私達の身も心も伸びやかに軽やかになる。心の底から喜びがもくもくとわき出すというのは、賢治ならずとも多くの人の経験しているところである。賢治はそれを詩人らしい、鋭い、深い把握によって表現した。

確かに、太陽はこの地上に生きとし生けるものにとって、光と熱、エネルギーの源であり、慈悲心溢れる「菩薩」にも等しい、不可思議な神秘的存在ともいえる。この作品は「太陽の賛歌」とも呼ぶべき作品であり、原題も「太陽マジック」であった。太陽に対する畏敬と感謝、その太陽の恵みのもとに生きる大歓喜が全身の喜びとなって表現されているのである。春とは、人生の春でもあり、賢治も、生徒たちも、青春のさなかにあった。

第二に、カエルやコマドリ、木々やカンゾウ、ツメクサ、風や虫や砂土に至るまで、すべてのものが賢治と共鳴し、交感し、語り合えるというアニミズム的な共生感覚である。アニミズムとは、自然界のあらゆるものにアニマ（靈魂）が宿るといふ信仰であるが、近代の文学者の中で

賢治ほどにもこうした原始的感覚に生きた文学者はいない。賢治はあらゆる生き物は兄弟であるという壮大な生命感覚の持ち主であったが、その「親」は大陽だと捉えて、その恵みに感謝した。感謝の心は喜びのものである。

第三に、教え子と共に働く農作業である。共同で、助け合つて働くことは当時の農家にとつて当たり前のことであつた。労力を無償で提供する「ゆい」という言葉もこの地方にはあつた。自然の息吹を感じながら、若い生徒達と共にする農作業は、時に、深い鬱に襲われ、故知らぬ憂愁に悩むこともあつた賢治にとつて、解放感を覚えるほどの大きな喜びであつた。

独断的な物言いになるが、健康とは喜びがなくてはならないと思は思ふ。悩みあり、苦しみあり、それに押しつぶされそうな暗い気持ちをもっているなら、健康感（自分が健康であると感ずるその感覚）を味わうことはできない。『イーハトーボ農学校の春』には、健康であり、歓喜の人であつた賢治の姿が投影されている。

以上のようなことを背景とする賢治の健康感覚は、現代の私達にも示唆するところが大きい。自然との生き生きとした交流、自然に対する畏敬と感謝の念、額に汗して、土に触れて、共同で助け合つてする労働の喜び……こうした健康な生活は、現代において失われがちな、しかも、大切な生活感覚ではないだろうか。

### 三、「雨ニモマケズ」手帳

#### (1) 手帳が書かれるまで

農民活動に奔走し、病のために挫折した賢治は自宅で療養生活を過ごしていた。幾分、健康回復の兆しも見られるようになったところへ、東北砕石工場主の鈴木東蔵が訪れた。石灰石粉及びそれを使った合成肥料についての相談であつた。幾度かの交流があり、賢治はこの鈴木を深く信頼するようになった。宮沢家でも資金を提供、賢治はその技師となつ

た。技師とはいつても時に工場を訪れて指導するほか、石灰の販売に努める営業マン兼務であつた。砕石工場は一関から大船渡線で一時間余り行つた陸中松川駅前（東山町）にあつた。賢治とすれば、もはや以前のよな農民運動は出来ない。石灰による土質改良を通して農民に尽くしたいと思つたのであろう。また、その勤務が緩やかでこれなら病弱な我が身にも勤まると考えたのかもしれない。事実、賢治は亡くなるまで、東北砕石工場技師として工場主の鈴木と様々な連絡をとつてゐる。

砕石工場の嘱託技師となつた（一九三二年、昭和六年二月二十一日）賢治は、九月十九日、石灰販売のため、商品見本をもって小牛田、仙台を訪れた後、東京に出た。ところが東京で高熱を発し、旅館八幡館で倒れて両親宛の遺書を書いた。それは次のようなものである。

「この一生の間、どこのどんな子供も受けられないような厚いご恩をいただきながら、いつも我慢でお心に背き、たうたうこんなことになりました。今生で万分の一もお返しできませんでしご恩はきつと次の生、次の生でご報じたいとそれのみを念願致します。どうかご信仰というのでなくともお題目で私をお呼び出してください。そのお題目で絶えずおわび申し上げます」（「我慢」とは、自分を偉く思い、他を軽んずることをいう。ここにもすでに述べた己れの「慢」をふり返る心がある）

九月二十一日付けの両親宛の遺書であつた。遺書はもう一通、弟、妹に向けて書かれたものもあつた。「たうたう一生何ひとつお役に立たずご心配ご迷惑ばかり掛けてしまひました。どうかこの我儘者をお救し下さい」というものである。遺書を書いた賢治は、最後に父の声が聞きたいと、実家に電話した。父は親戚の小林六太郎に電報を打ち、賢治を寝台車上で野駅から送つてくれるように頼んだ。花巻駅に着いた賢治は、直ちに自宅に向かいそのまま病床の人となつた。

高熱や咳、咯血、時に幻想などに苦しみながら、賢治は手帳に自らの歩みや燃えるような信仰心、あるいは創作のメモを記述した。ある時は詩の形で、ある時は写経として、ある時は思索メモとして。「雨ニモマケ

ズ」の詩もその手帳の中に「11・3」の日付（昭和六年十一月三日にこの詩が作られたことを示している）のもとに記されていたものである。

十一月三日と言えば、現代では文化の日だが、戦前は「明治節」と呼ばれ、明治天皇の誕生日である。国民として重要な祝日、いわゆる「四大節」の一つでもある。この日は晴天になることが多い特異日とも言われる。そのハレの祝日、病床にあって、再び立ち上がる日を夢みたというのはきわめて自然なことであろう。しかし、一時、病の回復を信じる日はあつたものの、結局は病床から立ち上がることもないまま帰らぬ人となった。賢治が亡くなったのは、奇しくも遺書を書いてから九二年後の一九三三（昭和八）年九月二十一日のことだった。

ひそかに書かれた手帳は賢治没後、遺品を整理していた弟の清六さんが賢治愛用の鞆のポケットの中から、その遺書と同時に発見したものである。

## (2) 「雨ニモマケズ」の主題

小学生にもわかるような平易な言葉で記された「雨ニモマケズ」の詩は、国民的な愛唱詩とも言うべく、多くの人に親しまれ、愛され、多くの人を励まし、勇気づけてきた。また、その時代や受け取る人の置かれた状況、個性によって様々に解釈されてきた。それはそれで良いわけであるが、賢治がこの詩にこめた思いはどのようなものであつたかを知るには、二つのことを押さえておく必要がある。一つは賢治の生涯を通して考えること、今一つは手帳全体を見て考えることである。

賢治の生涯からみると、この詩は死を覚悟してひとたび遺書まで書いた後、奇跡的に生きながらえて書かれた詩だということが大切であろう。病氣、死の自覚を通して賢治は、より徹底した形で宗教的人間像ともいうべき理想を掲げ、今一度の生を願った。手帳の中には「疾すずに治するに近し警むらくは再び貴重な健康を得ん日苟も之を不徳の思想 目前の快樂」（ルビ筆者）「自欺的なる行動」に「寸毫も委するなく」という

言葉も見える。奇跡的に助かった大切ないのち。それを無駄にせず、ひたむきに歩みたいという強い願いが記されているのである。

この手帳は全体として、病床における信仰手帳ともいうべく、ひたすらな信仰心を吐露したものである。賢治の信仰は、貧困に喘ぐ農民を救済したいという熱い思いと一体になっていた。農学校教師としての生活を捨てて、農村社会に飛び込んだのもその現れであつたが、そのような農民救済の願いは、病床に伏しても熱く燃え続けた。実行がかなわないだけに一層燃え続けたといつても良いかも知れない。もちろん病床にあつて、人々を救うことは無理なことで、まず第一に自分の健康を回復しなければならぬ。健康回復の願いは、人々を救済するためであり、それは仏教徒としての賢治のひたすらな願いであつた。

以上のような状況から考えて結論として、この詩の主題を一言で言えば、「完全な人間（仏）を目指して菩薩道を生きたいという熱い祈願」と、まとめることもできよう。ここで「菩薩」というのは「悟りを求めて修行する人」であり、「仏」とは仏陀のことで釈迦仏、阿彌陀仏、薬師仏など、いずれも「完全なる悟りに達した人」という意味である。と同時にそれは「無私の深い愛、慈悲心にみちたあわれみの人」でもある。手帳の中には「四苦八苦」の苦しみから、いかにして人々を救済するかという思索メモもあり、自らに向かつて「タダ諸苦ヲ抜クノ大医王タレ」と呼びかける言葉も見えている。「大医王」とはすべての苦しみから人々を解放する人、ということである。

この詩は、厳密に言えば「詩」というより「偈」というべきであり、韻文の形で、自らの境遇に即して菩薩として生きるとはどういうことなのかを示したものである。

## (3) めざすべき人間像

完全な人間、菩薩とは具体的にどのような存在か。それを賢治は自らの生活、反省をふまえてイメージ化している。その条件をまとめて見る

と次のようなことが指摘できる。

第一に丈夫な体をもっていること、このことが祈願の初めに記されているところに賢治のただいまの深刻な病気があった。喘ぐような呼吸の中で、おのずからなる眩暈としてこの言葉が自然に口をついて出た。そこには、病氣故に挫折した自らの人生に対する痛切な悔いがある。すでに述べたようにそれは自らの「慢」に対する反省である。

第二に、無欲で、曠（いか）らない、笑みをわすれない、ということである。これは理想とする心のあり方を記したもので、背景には仏教でいう「三毒」の教えがある。すなわち仏教の教えによれば我々の心をむしばむものとして、①貪欲（むさぼる心）②瞋恚（自分の心に逆らうものに対して、憤り、憎しみを覚える心）③愚痴（物事の是非をわきまえない愚かな心）の三つがあるという。「欲ハナク」「決シテ曠ラズ」「アラルコトヲジブンヲカンジョウニ入レズニヨクミキキシワカリ」「アラス毒を退けた心の有り様を日常の平凡な言葉で表現したものである。「イツモシズカニワラツテイル」という言葉は、怒りに囚われない穏やかな心をいうばかりでなく、三毒の支配から自由になった覚者の姿を描いたものであり、ここには仏像の微笑に通うものがある。それは又「仏」の知恵の象徴でもあろう。

第三に、質素な暮らしである。その生活において、つましく、謙虚に生きることである。「玄米四合」「味噌ト少シノ野菜ヲタベ」ということで、それは具象化されている。「四合」についてこれは一日に食べる量としては多いのではないかと指摘もある。しかし、菜食主義を貫こうとした賢治からすれば、玄米から摂れる栄養分を考えた上でのことだったと考えられる。

第四に優れた理解力、記憶力を持つことである。「アラルコトヲジブンヲカンジョウニ入レズ、ニヨクミキキシワカリ」（傍点、筆者）とあるが、自分を勘定に入れ、自分の欲望に支配されて真実が見えなくなるのである。（賢治は欲望や利己主義に支配される人間の愚かさをテーマとす

る作品を幾つか書いている）哲人のような、また覚者のような透徹した叡智に満ちた洞察力を願ひ、しかも、「ワスレナイ」ことを祈願する。ちなみに、凡夫たる私達は、良く物事を見ていないし、聞いてもいない、洞察力も乏しく、そしてすぐ忘れる。易しい言葉で書かれたこの理想は、実は及びがたい理想でもある。こうして最初にかにも素朴な願ひのよう記された「ジョウブナカラダ」への憧れは、遙か深い完璧なる人間像へと深められていく。それは、以下の実践の土台ともなるものである。すなわち、東西南北それぞれ、病氣に苦しむ子を救い、疲れた母に代わって仕事を助けてやり、死にそうなる人を勇気づけ、喧嘩や訴訟のむなしさを説く、つまりは「四苦」からの救済を使命として、東西に奔走することを願っている。ここには、四苦（生老病死）からの解放を使命とした釈迦の故事が踏まえられている。すなわち、釈迦は王子として幸福に暮らしていたが、四門からでる老人、病人、死者を見て、出家を志したという（四門出遊の故事）。賢治は釈迦を目指していた。釈迦のごとく、あらんと願ったのである。

そして最後に願うこととして、皆に評価されることを求めない、名声を拒否する謙虚さである。現実の賢治は決して日照りの時に涙を流すだけの人間でも、寒さの夏に、おろおろ歩くだけの人間ではなかったし、おろおろ歩いているだけで良いとは思っていなかった。ここには自分の内なる慢心を徹底的に排除し、自己を無力なる愚者のごとく捉える感覚が潜んでいる。そこには、いつの間にか「虚傲な態度」に陥り、自らの健康を害した反省もあるのだろう。

それにしても「デクノボー」と呼ばれたい、というのは、極端な自虐的な願ひとも見える。しかし、これはよく指摘されるように『法華経』の「常不軽菩薩」の故事を踏まえたものである。常不軽菩薩は、さまざまな衣服を身にまとい、市内を歩き、自分を軽蔑する人々にさえ深くこうべを垂れ敬いの心を示したという。賢治の文語詩に「常不軽菩薩」と題する一編もあり、人々に侮られてもなお人を軽んずることのない（謙

虚さを忘れない)菩薩が讃えられている。「デクノボー」と呼ばれたという表現から私達は、文字通り人々に侮られたいなどという自虐的な心を読みとるのではなく、常不輕菩薩のごとくありたいという願いを読みとるべきであろう。

再度繰り返し返してまとめておけば、「雨ニモマケズ」の詩は、病床に伏す賢治の健康への悲願と、もし今ひとたびの生が与えられたならこのように生きたいという強い再生への願いを呟くようにして書き記した、「悲願の詩」と言うことが出来る。賢治の目指した人間、それは「諸苦ヲヌクノ大医王」である。「大医王」とは、すなわち、釈迦、仏の異名だが、その仏を目指して修行するのが「菩薩」に他ならない。この詩はつまりは、賢治自らのこれまでの歩みと信仰の上に立って、菩薩道を生きんとする「決意」を記した詩とも見ることが出来る。

梅原猛は賢治を「近代日本の生んだ菩薩」であると言っているが、まさにその通りであろう。賢治の友人、藤原嘉藤治は「賢さんは物質の所有者であることからのがれようとしていた。今時分まで健康でいたら托鉢僧として雪水行脚をやっていたに違いない」と興味深い想像をしている。

賢治は、その死の直前に遺言として、親しい知己に『法華経』を配布すること、そして自分の生涯はこの『法華経』の心を人々に伝えるための生涯であり、自分の生涯を通して仏の心に触れて欲しい旨のことを語った。その遺言に従って考えるなら、賢治の生涯や作品を通して、仏教(宗教)とは何か、と問われているというべきではなからうか。

#### 四、「雨ニモマケズ」の現代的な意義

日本医師会の会長であられた坪井榮孝先生は、世界医師会会長に就任された折、その就任挨拶の最後に、「ご自分の最も好きな詩としてこの「雨ニモマケズ」の詩を朗読された。それはこの詩が医師として使命感を鼓舞する詩だと感じておられたからであろう。「雨ニモマケズ」の詩は

まさしく医療人のめざす理想を歌っているということもできる。現に私の教えている学生の多くが、医師としての理想をこの詩に見いだしている。

手帳を見ると戯曲のメモ書きのような記述があり、その中に「土偶坊ワレワレカウイウモノナリタイ」という言葉が見える。「土偶坊(でくのぼう)」とは、「ワレワレ」皆の理想ではないか、という思いが賢治にはあったのである。

賢治の説く理想の人間像を別な言葉でいえば、次のようにまとめることも出来るのではないだろうか。

- ① 強い使命感をもって生きる。(使命感)
- ② 人々を慈しむ心を持ち、苦しむ人々に奉仕する。(慈悲の心)
- ③ 利己的な欲望に支配されず、質素な生活で満足する。(質素)
- ④ 人を憎まず、怒らず、寛大な心を持つ。(寛容)
- ⑤ 人から侮られることを恐れず、名声を求めない、謙虚な心を持つ。(謙虚)

以上の前提として自らの健康に配慮するということがある。このように要約してみると、私は全面的にその精神に共感を覚えるものである。勿論、現実にはこのような理想にははるかにほど遠いと言わざるを得ない。しかし、心のあり方、生活の理想としてはこれに近づきたいと思う。高い理想だが決して窮屈な教えではない。かえって「宗教的自由」とも呼ぶべき、世間的な束縛から放たれた伸びやかささえここにはある、と思ふ。

現代社会は、欲望や競争、名声、人の評価、目先の利益に心を奪われ、安らぎを失った社会である。競争を善とし、経済的な効率を何よりも優先する非情な風潮が世にはびこっている。しかし、それは必然的に敗者を生みだす。近年、格差社会ということが言われ、富める人と働いても普通の生活さえ出来ない「ワーキングプア」とよばれるような人々とに分化しつつある、ということは、多くの国民の実感であろう。私達の周

辺には、生活に苦しみ、悩む人が多くいる。仏教の教える「慈悲」の心に立ち返り、温かな、助け合う社会、共生する社会を建設することが、今、求められているのではなからうか。「雨ニモマケズ」の深い知恵と優しさを今一度、かみしめたいと思う。

(本稿は平成十八年八月二十四日、全国リハビリテーション学校研修会における講演をもとにして記述したものである)

(受付 二〇〇六年一月八日)